

Title	「科學」(宮崎市定著)
Sub Title	
Author	竹田, 龍兒(Takeda, Ryuji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1948
Jtitle	史学 Vol.23, No.2 (1948. 6) ,p.123(259)- 124(260)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19480600-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

に一層詳細確實な資料を補足敷衍していた
べきたいものである。文化圈説が學界の全
面的承認を得んが爲にはなほ世界各地の
精細な調査が必要であり、東亞の地域の考
古、民族・人類・言語學的研究の未發達が
此點に於ける綜合的考察に多大の支障を
あたへるものと云はねばならぬ。此種問題
の解決には學者は從來の如く個別的な研究
によらず、相協力して、各地々域の研究調

評書

「科舉」

(宮崎市定著)

竹田龍兒

かねてから科舉については多大の興味と
關心とを寄せてゐた私は昨年本書の刊行さ
れたのを知るや逸早く一本を手に入れて貪
る様に通讀した。著者が宮崎教授だといふ
丈ですでに本書の内容に對して大きな期待
を懷いた。跋文によれば本書は幾多不利な
條件のもとに急いで纏め上げられたものゝ
如くであり、著者は我乍ら自信のない書物
であると謙遜してをられる。さう言へば従
來の著者の多くの論考に比して稍精彩を缺
く憾みなしとはしないけれども、やはりあ
れだけの問題を見事に料理された腕前の程
は敬服の他はない。

査に従事しなければならず、かゝる協力の
上に石田氏の著論も今後の發展を見ること
と信ずる。吾人は、戰災に藏書を失はれた
著者が、不死鳥の如く、灰燼の中より立上
り、此著を提供せられたその精神力に畏敬
の念をいだくと共に此好著が弘く學界の各
方面に愛讀せられ、新研究を誘起せんこと
を期待する者である。(筑摩書房刊)

思ふに科舉の問題は余りにも關聯する
ところが多方面で相當の難物であるためか
本邦には未だ一冊の專著すら存在せず、ま
た關係論文の如きも宮崎教授が參考資料著
作論文一覽中に擧げてをられる數種以外に
加藤繁博士の「科舉の政治的意義」(支那
學雜草所收)、清水泰次博士「科舉の研究」
(早稻田大學、文學思想研究第四卷)、勝又
憲治郎氏「秀才の辨」(東方學報 東京第
六冊)荒木敏一氏「宋代初期の殿試に於け
る狀元決定の方法」(東洋史研究八の四)
等があるに過ぎない有様である。
しかも科舉の制度たるや隨唐以來清末に

至るまで千數百年の永きにわたつて沿用せ
られ來つて、中國の政治・社會・文化の上
に實に量り難い影響を及ぼしてゐるのであ
つて、苟しくも中國の舊社會について論議
する場合にはこの問題に觸れないで済ます
ことは不可能だと言つても恐らく過言では
なからう。然るに多くの人々はこの制度の
本質なり意義なりに關しては甚だ常識的乃
至は獨斷的な見解を有してゐるに過ぎない。
これは何に基因するか、言ふまでもな
く適當な概説書が無かつたからである。今
日まで科舉に關する研究書が一つも出版さ
れてゐないといふのは全く不思議な現象
で、これこそ日本に於けるシナ學の貧困を
物語るものは他ならない。今回宮崎教授に
よつて始めて多年の渴望が醫せられること
となつたのは我々にとつての大きな喜びで
なければならぬ。著者は本書に於いて科
舉の問題をあらゆる角度から論じてをら
れ、凡そ科舉に關する限り殆んどすべてが
網羅し盡されてゐる、それ許りでなく動も
すればこの種の書物が陥り勝ちな單なる制
度史としての平板な敘述から巧みに脱却す
ることに成功してをられる。

先づ本書の目次を紹介すれば、緒論・第
一章 科舉の沿革・第二章 清代に於ける
科舉の制度・第三章 近世支那社會に科舉・
第四章 科舉制度の崩壞 となつてをり、
そのうち第二章に特に多くの頁が割かれて

ゐるのと多數の圖版が挿入されてゐるのが眼立つてゐる。それは本書の成立がさきに著者が東亞研究所の委嘱を受けて起稿された「清朝の官吏登用制度」が基礎になつてゐるところから來てゐるのである。

本書を通じて私が最も興味を惹かれたのは第三章である。本章は一、社會階級と科擧 二、官僚生活と科擧 三、科擧と學問の三節に分れ、第一節では六朝貴族制の成立及びその崩壊とこれに代る近世的士大夫階級の出現の問題を選舉制度の變革との關聯に於いて論じられ、第二節に於いては宋代に科擧の基礎が確立するに至つた事情並びに科擧と黨争との關係、科擧制度下に於ける官界の氣風、下第者の失業問題が取上げられてゐる。第三節は科擧と學問との相關關係を論じたもので、各時代に於ける學問の展開や文體の變遷についても論及されてゐる。

この第三章こそは科擧制度研究の核心とも稱すべきであつて、それだけに歴史家としての著者の面目が最もよく窺はれる。例へば「唐代の科擧は動もすれば衰頽に赴かんとする貴族制の補強工作たるの觀がないではなかつた」と喝破されてゐる如きはその一端に過ぎない。然し間々説明が簡略に過ぎて理解を困難ならしめてゐる場合もありはしないかと考へる。試みに一例を擧げれば六朝貴族が唐代に至つてまさに没落

せんとしつゝあつたことを論じて「既に貴族成立の二大支柱たる土地占有と政治的權力との何れをも有せざる貴族は全く表面的なる陽炎の如き存在に過ぎぬ」と述べてをられるが、彼等は如何にして土地から遊離するに至つたかについて若干説明を加へて置いて戴き度かつた。實はこれらの點についても恐らく高見に接し得るであらうことをひそかに期待してゐたのである。

次に牛李の争ひに關して「進士が朝廷に重用されるゝに及んでここに科擧を廻つて一大黨争が展開せられた。所謂牛李の黨なるものがこれである」(二三三頁)と言ひ、更に「斯くして唐朝の官僚は科擧を中心として二派に分裂し、進士黨と任子黨とに分れて政權争奪を行つたが云々」(二三三頁)と述べてをられるのは果して如何であらうか。成程、唐書選舉志にも「宰相李德裕尤も進士を惡み」と見えてはゐるけれども他方彼は元和十一年の試に李逢吉以下三十三人の寒素の士に及第を與へたことも事實であつて、「元和天子丙申年、三十三人同得仙、袍似爛銀文似錦、相持白日上青天」の一詩はこの時のことを詠じたものと稱せられる。後に至つて彼が謫せられるやその所謂門生中に「八百孤寒齊下淚、一時回首望崖州」といふ詩を賦したものとさへゐたと傳へられてゐる程であるから、彼が任子黨の中心人物をして無闇に進士を仇敵視して

ゐたとは考へられない。科擧を廻つて一大黨争が展開されたことは疑ひのない事實であるが、それは科擧が朋黨の具に利用されたといふ意味に於いてのみ言ひ得ることではなからうか。

なほ教授は制擧は他薦制であつたと主張してをられるのであるが、かの遊仙窟の著者を以て擬せられてゐる張鷟が進士に登第後、「凡應八擧皆登甲第」と傳へられ、員半千も「凡擧八科皆中」と稱せられてゐるなどはすべて他からの推擧を俟つて始めて試に應じ得たものであらうか。この點些か疑ひなきを得ない。最後に中國の科擧制度が安南や朝鮮や我が國に與へた影響についても若干の考察を加へて置いて戴き度かつた。固よりこれは蜀望の言に過ぎないのであつて、本書の價値には何等關係する事柄ではない。筆者は中國研究者が本書によつて必ずや啓發せられる點の尠くないことを確信して疑はないものである。敢えて大方の一讀をお薦めしたい。言辭の時に非禮にわたりしものなきやをひそかに懼れつゝこゝに筆を擱く。(秋田屋發行)